

質の高い興味を育む授業方略の検討

田中瑛津子(東京大学大学院 教育学研究科)

子ども達の学習に対する興味を育むことは長年重要な課題であった。一言で興味と言っても、その質は様々である。理科の興味一つをとっても、実験ができるから楽しいのか、原理原則を学ぶことで身近な現象を説明できるようになるから楽しいのか、様々なタイプの興味が考えられる。しかし、今まで興味の質に踏み込んだ研究はほとんど行われておらず、どのような興味を育むのに、どのような授業を行えばよいのか、が明らかにされてこなかった。そこで本研究では、理科に対する興味に焦点を当て、興味タイプを弁別可能な尺度を作成し、さらにどのような授業を行うことで、質の高い興味を育むことができるのか、について検討する。

研究1ではまず、興味タイプを弁別可能な尺度を作成するとともに、各興味タイプの特徴について検討することを目的とし、小学5年生から高校1年生までを対象とした質問紙調査を行った。結果、興味は「自分で実験を実際にできるから」などの項目からなる実験体験型興味、「実験の結果に驚くことがあるから」などの項目からなる驚き発見型興味、「わかるようになった時うれしいから」などの項目からなる達成感情型興味、「色々なことについて知ることができるから」などの項目からなる知識獲得型興味、「自分で予測を立てられるから」などの項目からなる思考活性型興味、「自分の生活とつながっているから」などの項目からなる日常関連型興味、以上6つのタイプに分けられることが示された(図)。また、より深い興味であると考えられる、思考活性型興味や日常関連型興味は、意味理解志向(学習内容を単に暗記するだけではなく、理解を重視する志向性)や学習行動と関連があるにも関わらず、どの学年においても他のタイプの興味に比べて低い、ということが示された。このことから、思考活性型興味や日常関連型興味を高めることが、重要な課題であることが示唆された。

研究2では、教師の指導スタイルを測定する尺度を開発し、どのような指導が、生徒の興味、とくに思考活性型興味や日常関連型興味を効果的に高めることができるかについて、検討することを目的とし、研究1と同じ調査協力校に質問紙調査を行った。結果、教師の指導スタイルは7つの観点から評価できることが示された。次に、教師の指導スタイルと、思考活性型興味および日常関連型興味の春から冬にかけての伸びとの関係を検討した。結果、日常関連型興味については、具体物の提示や日常との関連の強調によって、育むことができることが示唆された。思考活性型興味については、単に考える機会を与えるだけでは高まらないことが示された。目標と到達度を明確にすることや、生徒に寄りそうことなども、同時に意識した授業を行うことで初めて、思考活性型興味を育むことができるだろう。今後、データを追加し、指導スタイルが興味に与える影響について、より詳細に検討して行く必要がある。

研究3では、中学2年生を対象にした5日間の実験授業を実施し、思考活性型興味や日常関連型興味を育む授業方略の提案とその効果の検討を行った。非日常目標群では、授業の導入時にチャレンジ問題を提示し、この問題を講義や協同学習を通して解けるようになることが、本時の目標である、と伝えた。授業後半の協同学習(チャレンジ問題をグループで話し合いながら解く)がうまく機能するよう、講義セッションで教え合いを積極的にさせたり、協同学習する時のポイントを伝えたり、レベルが調整できるようヒントカードを用意したり、といった工夫を行った。日常目標群では、授業の導入時に到達目標として提示するチャレンジ問題に日常的なカバーストーリーをつけて、生徒にとって身近に感じられる課題にしたという点だけが非日常目標群と異なる。結果、非日常目標群では、協同学習中のやりとりを通して、学習内容に対する理解は深まるが、思考活性型興味や日常関連型興味は効果的に高まらなかった。一方、日常目標群では、導入後の授業に対する興味が高まるほか、協同学習の効果が非日常目標群に比べて増幅したり、思考活性型興味や日常関連型興味が効果的に高まったりすることが示された。今後、到達目標として提示する課題に日常的なカバーストーリーをつけることで、講義セッションへの取り組み、協同学習中のやりとりなどがどのように変化し、今回の結果が得られたのか、生徒のノート、音声、映像、授業中や授業後の自由記述といったいろんなデータから検討していく必要があるだろう。

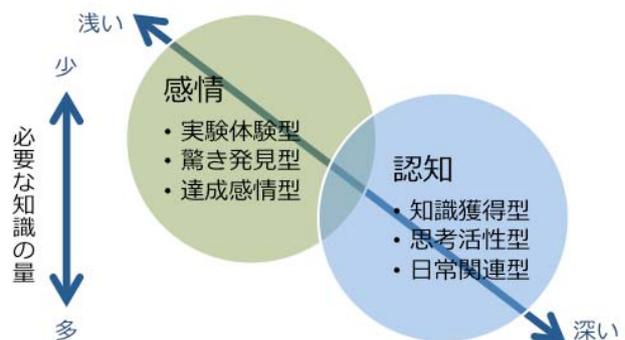


図 興味尺度の構成